

推薦者: 平山華那さん(社会福祉学科1年生)

書名	壊れかけの子供たち:親はどうする？
出版社	東洋出版
著者	篠田知璋
出版年	1997
ISBN	9784809672194
所蔵	本学、新潟県立×、新潟市立×、豊栄×



この本は、不登校、引きこもり、食事がとれない(拒食)、食べ過ぎ(過食)、無気力など、心や体の症状を現す子供たちについて書かれています。

これらの子供を筆者は本の中で「壊れかけの子供」と呼んでいます。そして筆者はこれらの症状や行動を起こす子供たちには共通点があると述べています。それはその原因が親との関係、育て方、家庭環境にあることが多いということです。

親がどのように子供たちと接したか、それは子供がそれを頭で記憶している・していないに関わらず、子供の性格、行動パターンとして一生続く可能性のあるものです。

壊れかけの子供たちは家庭で作られます。子供たちを育てるのは親だけではなく学校の先生でもあり、社会でもあると言えます。しかし、親にとって代われるものはないのです。

私はこの本を読んで筆者の意見にとっても共感しました。そして自分が親になったら自分の子供とどう接すれば自分も子供も幸せな人生を送ることができるのだろうかと考えさせられました。

推薦者: 関川理沙さん(社会福祉学科1年生)

書名	十二番目の天使 The twelfth angel.
出版社	求龍堂
著者	オグ・マンディーノ
出版年	2001
ISBN	9784763001061
所蔵	本学×、新潟県立、新潟市立、豊栄



主人公のジョンは新社長として妻子と共に帰郷した。町中をあげて歓迎され、幸せな日々を送っていたが、彼を待ち受けていたのは妻子を失うという突然の悲劇だった。ジョンは生きる意味を見出せなくなり、自殺をしようと考えていた。そんなジョンを絶望のどん底から救ったのは、親友のベンだった。彼の勧めで少年野球の監督を務めることになったジョンは、少年ティモシーとの出会いにより、人生を大きく変えることになった。

ティモシーは小柄な体格で技術的にも他のメンバーより劣っていたが、「絶対あきらめるな」と人一倍声を出し、自分そしてチームメイトを励まし続けていた。12人のメンバーのうちただ1人ヒットを打っていないティモシーのためにいつしか観客までもがその言葉を合唱し、彼を応援するようになった。そしてティモシーは決勝戦で初ヒットとなる同点打を放った上、勝ち越しのホームを踏み、チームを優勝へと導いた。しかし、これが彼にとって最初で最後のヒットとなった。ジョンは、ティモシーが脳腫瘍という重い病気でありながら野球を続けていたことを試合後初めて知った。数ヵ月後、ティモシーは亡くなってしまったが彼のおかげでジョンは前に進むことが出来た。

「絶対にあきらめるな」というティモシーの言葉や毎回の三振にもくじけず、立ち向かう勇姿は、ジョンやチームメイトだけでなく、私にも強いメッセージをくれた。また、病気であると知っていたにも関わらず、友達を励まし続けた姿やみんなと野球をし、ヒットを打てたことが幸せだったという彼の言葉にとっても感動した。

これから先、弱音を吐いたり、くじけそうになることがたくさんあると思うが、「絶対にあきらめるな」という言葉を思い出して、何事にも挑戦していきたいと思う。この本は悩みを抱えている人に読んでもらいたい1冊です！

推薦者:池田奈津希さん(社会福祉学科1年生)

書名	たったひとつのたからもの
出版社	文藝春秋
著者	加藤浩美
出版年	2003
ISBN	9784163654508
所蔵	本学、新潟県立、新潟市立、豊栄



この本は、ダウン症と重い心臓病を抱える加藤秋雪君とその家族の6年間の生活が書かれています。秋雪君は、生後1週間後に医師から染色体と心臓の検査をするようにすすめられ、検査したところダウン症と心臓病であることがわかりました。

その心臓病はかなり重度なもので余命は1年、その間に風邪を引いたり、虫歯になるだけでも命が危ないと言われました。両親は残酷な現実には戸惑いながらも「大きな壁がたくさんある人生になりそうだけれど、きっとそれを覚悟で自分たちのところにやって来てくれたのだ」と思い、秋雪君に対してきちんと向き合うことを決心しました。

その後奇跡的に体調を崩すこともなく1歳の誕生日を向かえることができ、家族でいろんな所に出掛けたり、施設にも通うようになり、秋雪君にとっても両親にとっても充実した生活を送っていました。

それからは心臓病が原因で体力が衰えてくることもあり、体調を崩すことも増えてきましたが、医療の力だけでなく秋雪君の強い生命力で6歳の誕生日を迎えることができました。しかしその3ヵ月後、心臓病の悪化のため、秋雪君は亡くなりました。

母親は「今現在を楽しく元気に過ごせたら、それが一番大切に喜ぶべきことだ」と言っています。本の中で「人の幸せは命の長さではないのです」という言葉が紹介されていますが、秋雪君が常に全力で生き抜いた姿がその言葉の本当の意味を教えてください。ダウン症と重い心臓病を抱えながらも強く生きた秋雪君に「精一杯生きる」ということを考えさせられました。

推薦者: 小嶋久美子さん (社会福祉学科1年生)

書名	痴呆の人の思い、家族の思い
出版社	中央法規出版
著者	呆け老人をかかえる家族の会
出版年	2004
ISBN	9784805824269
所蔵	本学、新潟県立×、新潟市立、豊栄×



本書では認知症が取り上げられており、実体験に類似し興味を惹かれたので私はこの本を選択しました。

私の曾祖母も認知症となり自宅療養が必要となったため多少は介護する側・される側の考えが理解出来ると思っていました。しかし、本書を読み、認知症になった人の思いが切実に伝わり、私は全く理解していないのだと痛感しました。認知症になった人の不安や苛立ち、怒り、よるこび、やさしさ。頭では理解しているつもりなのに行動に移せない歯痒さ。認知症の方の行動は理解することは家族だとしても困難であり、端から見ただけではその行動に隠された真の意味を理解するには、いかに相手と向き合い考えるかが大切だと改めて感じました。

「ぼけても心は生きている」というスローガンが本書にはあります。私も認知症になったからといって、心は生きていると思います。曾祖母は、たまに物事を忘れることもありましたが、大切なことは覚えていて楽しそうに話をしてくれました。私は母達のように介護が出来なかったので曾祖母の話に耳を傾けていると「ありがとう」と言ってくれました。「ありがとう」という言葉は不思議な力があると思います。見返りを求めるつもりはないのですが、人間は多少なりとも見返りを求める生き物だと思います。「ありがとう」という言葉は言う側と聞く側両方を嬉しい気持ちにさせ、大切な人のために何かしたいという気持ちも生まれると思います。

私はとても印象に残っている文章があります。認知症と診断され、何も理解出来ないとおもわれ施設に入所したけれど実は意識もしっかりしていて家族の負担になると思い入所し、私はその人の家族に対する想いに涙しました。

私は本書を読み、改めて自分自身の未熟さを実感し、また、未熟さを否定するのではなく認め、相手の立場に立ち物事を考え行動出来る社会福祉士になりたいです。知識や技術だけでなく相手を思いやれる心の育成にも励みたいです。